同志社図書館人物誌―(2)

図書館司書課程を築いた人達

宇治郷　毅、原　田　隆　史

１．小野則秋

１、略歴

写真提供：同志社大学図書館

小野則秋は、1906（明治39）年２月20日、大分県下毛郡耶馬溪町にて生まれた。1919（大正８）年４月、私立跡田中学校に入学後、病に冒され退学。父秀岱より儒学を学び、以後決心して独学により検定試験の道を選び、哲学、教育学、日本文学等の研究に勤しみつつ、師範学校、中学校、高等女学校の教員免許状を取得した。1927（昭和２）年３月より６年余にわたり、福岡県内の公立小学校、実業学校の訓導、教諭を歴任した。1933（昭和８）年10月、福岡県八幡市立図書館司書となり、翌年には、早くも主席司書となり館長代理を兼務した。

1935（昭和10）年４月、同志社大学図書館司書に就任[1]。以下、図書館主任（1944年）、整理課長（1945年）、館長補佐兼務（1955年）、同志社社史資料編集所主任（1963年）、同志社総長付部長（1971年）となり、1971（昭和46）年２月28日、定年退職。この間、1952（昭和27）年から1971（昭和46）年まで、文学部嘱託講師として正式に任命された。小野則秋が学内各種の講義や研究発表を通して長きにわたり、図書館学教育および養成に携わって大きな貢献を果たした。

小野の図書館学の講義は学内にとどまらず、学外では佛教大学や京都外国語大学をはじめ、京都女子大学、関西大学などで、また1952（昭和27）年からは毎年、夏期には司書・司書補講習の講師として別府大など私立校６校、そして国立校７校から招かれた。なお、佛教大では1960（昭和35）年から非常勤講師、1971（昭和46）年に同志社大学退職後には、専任教員となり、1973（昭和48）年、佛教大学図書館長となった。1977年には、京都外国語大学教授として３年間にわたって奉職した。1987（昭和62）年５月16日逝去、享年81歳であった。

２、業績

小野則秋の業績を概観すると、まず同志社大学図書館学研究会の発足、同志社大学図書館学講習所の開設、さらに同志社大学図書館司書課程の黎明期を形成した功績が大きい。次に、研究面での業績もそれに劣らず大きいものがある。特に、図書館学研究の初期の頃に精力的に発表された図書館の本質論、図書館教育論、図書館学論に関する彼の発表は、わが国の図書館学研究の歴史に燦然と輝いている。また、図書館の本質論に端を発して図書館史の研究も精力的に行っている。『日本文庫史』（1942年）、『日本文庫史の研究』（1944年）で、わが国における文庫＝図書館の通史的な把握を試みたが、これらの歴史書は歴史の中で図書館の本質を明らかにしようという、本格的な研究であった。加えて、学会や社会との関わりでも、青年図書館員聯盟の理事として、また日本図書館研究会や京都図書館協会の創設メンバーのひとりとして幅広く活躍した。

（１）教育面の業績

小野則秋が図書館にともなう研究と教育、さらには図書館員の養成と研修に関心を抱き、同志社大学図書館学研究会を発足させたのは、戦前の1941（昭和16）年のことであった。さらに、同志社助成による同志社大学図書館学講習所開設の中心人物として、1946（昭和21）年から同講習会の開催に尽力している。文部省による講習所はすでに戦前から行われているところであるが、私立大学により図書館学講習所が開設されたのは、慶應義塾大学に日本図書館学校（Japan Library School）がＧＨＱの命により設置された1951（昭和26）年より５年も古く、我が国では最初であった。

同志社大学図書館学講習所開講の趣旨は小野によると、「終戦後の日本の図書館は一種の虚脱状態に陥っている。また有能な館員の応召、徴用等により図書館の人的体制が極度に弱体化している。かろうじて図書館は形ばかりの状態に追い込まれている。このような状態をいかにして打破するか、これは自分の図書館だけの問題ではなく、広く日本全体の問題であり、そのようなところから図書館意識の昂揚と図書館技術の向上を目的とした図書館員教育こそが、この問題の突破口になる」という認識に基づくものであった。これはとりもなおさず、青年図書館員聯盟時代の小野の熱い思いが込められていたと思われる。かつては小野の国立国会図書館員批判に激しく反発した中村初雄（のちに慶應義塾大学文学部図書館・情報学科教授）が、後年小野を「革新と情熱の人」という表現を用いて称賛した所以でもある[(2)]。同講習所の受講資格としては、図書館員または学校、研究所、会社等で図書館の仕事にかかわる者、および将来、図書課員を志望する者、あるいは図書館に興味を持つ者であれば、男女や年齢を問わなかった。また、同志社大学の出身であることも受講の条件とはしていない。受講人数は、全科履修生30名、専科履修生若干名の定員の枠を設けていた。受講生のなかには後年、図書館界で活躍し

た人々の名前が少なくない。同講習所の詳細については、本誌にも再録した青木次彦の「同志社大学図書館学教育史稿」に詳しく述べられているので参照されたい[3]。

小野則秋は、同講習所で第１回から第４回まで講師もつとめ、「図書館史」「図書館教育」「図書館管理学」（いずれも第１回～第３回）、「図書館設置事務論」「図書整理法」（ともに第４回）を担当している。ただし、第５回の講習所では小野は講義を担当していない。これは、小野が1949（昭和24）年９月に中央教職適格審査委員会から突如教職不適格の判定を受け、それが再審査で解除された1951（昭和26）年夏まで担当できなかったためである[4]。

同講習所は、1951（昭和26）年に第６回の途中で終了し、その年から同講習所は同志社夏期大学に移行した。これは、1951（昭和26）年は図書館法第６条による文部大臣委嘱の、いわゆる「司書課程」が各地の大学ではじめられた年であり、それらと同等以上の内容と自負していた「講習所」を、大学の正規課程と同等と位置づけられた同志社夏期大学にうつすことで、司書資格の取得を可能とすることにしたという経緯によるものである。ただし、上記の事情から、この1951（昭和26）年の夏期大学において小野は科目の担当はかなわなかった。とはいえ、小野の教職不適格判定を解除させるべく、当時京都図書館協会を中心に図書館界あげて再審請求・解除のための署名活動が行われていたことや、夏期大学への移行に際して、小野の良き協力者であった小畑渉や多田光（ともに当時同志社大学図書館司書）が尽力していた状況を考えれば、小野自身もその構想に関わっていたことは想像に難くない。

さらに1952（昭和27）年には、文学部に自由選択科目として、また教職課程にも設置する形で、1951（昭和26）年度から開講していた夏期大学とあわせて司書資格を取得することができる同志社大学図書館司書課程（以下、司書課程とする）が発足した。司書課程では、大学の正規の科目として当初４科目16単位を設置、その後施行規則の一部改正のため、14科目30単位に増設した。小野は、文学部講師として初期にはひとりで全ての科目を（後年、同志社大学教授となる青木次彦らのサポートを受けてはいたが）担当し、また1959（昭和34）年度からは、同志社大学文学部専任講師として迎えられた吉田貞夫や、重久篤太郎をはじめとする嘱託講師とともに担当した。なお、司書課程は小野が定年退職する1971（昭和46）年には15科目32単位にまで増設されている。

小野は嘱託講師の身分ではあったが、司書課程発足の原動力となっただけではなく、その後もその運営や管理に関わる中心的立場にあり司書課程の基礎を築いた。小野の存在なくしては、現在の司書課程は存在しえなかったかもしれない。まさに同志社大学図書館司書課程の創始者というべき存在であったといえよう。

（２）研究面の業績

小野の研究業績一覧は、「小野則秋先生主要著作目録」（『古稀記念　小野則秋図書館学論文集』（同刊行会、1978年、p667-674）によれば、著書は1942（昭和17）年、教育図書（株）より発行の『日本文庫史』をはじめ29冊、論文は1936（昭和11）年「図書館教育の本質」（『圖研究』第９巻第１号）以下66編におよび、その他として随筆を含むと82編になる（『図書館界』（39巻２号）p.i-iv、も参照のこと）。

そのうち、特に顕著な業績としてあげることができるのは、「図書館の本質論」「図書館教育論」「図書館学論」さらに、図書館の本質論に端を発した図書館史の研究であろう。

１）図書館の本質論、図書館教育論、図書館学論に関する業績

小野は、同志社大学図書館に勤め始めてから数年の間に精力的に図書館の本質論に関する論文を発表している。小野による、これらの主題に関する最初の研究として特に注目すべきであるのは、最初に発表した「図書館教育の本質」（『図書館研究』９巻１号、1936）であろう。

小野がこの論文を発表する直前の1933（昭和８）年には、図書館令が全面的に改正され、その第１条で図書館の目的が初めて明確に示されるとともに、“図書館ハ社会教育ニ関シ附帯施設ヲ為スコトヲ得”という第２項が付加されたことによって、図書館とはどのような存在であるのか、また図書館の役割や本質に関する議論がまきおこっている。すなわち、図書館が資料を収集・保存して閲覧に供することを第一義的使命とする施設なのか、利用者の教養および学術研究に資するという目的以外に、たとえば運動競技などの指導などといった広い範囲の社会教育全般に関わる機能を持つ施設なのかといった議論である。

これらの議論を受け、小野は1936（昭和11）年に「図書館教育の本質」（『図書館研究』９巻１号）を発表した。「図書館教育の本質」には「図書館独自の立場に対する考察」という副題がつけられているように、小野はこの論文の中で教育機関としての図書館独自の立場を追求しようとしている。教育機関を論じる上で問題になる教育とは何かに関してドイツのＥ.クリークの教育学説を借り、“教育とは至るところ全ての時に人間界において行われつつある社会の根本的機能としての同化である”とする。その上で、学校教育においても、また各種の社会教育機関それぞれにおいて特有の教育作用があるという論を展開している。さらに３年後に発表した「図書館教育の概念―書き改められた教育学―」（『図書館雑誌』33巻１号）では、図書館における教育作用の概念をさらに一歩進めて、図書館教育には学校教育や社会教育とは異なった図書館教育独自の本質的分野を持つことを主張している。さらに、学校教育や社会教育が今日の人を対象とし、その教育が社会的意思によって制約されるのに対して、図書館教育は今日の人だけではなく明日の人の教育も視野にいれるともに、その内容においては図書による普遍的な最高の

文化体系の組織化とその保持を行うものであり、図書館は超時代的な社会文化の総合機関としての役割を果たすものであると述べている。このような小野の図書館教育の本質の追求とは、とりもなおさず図書館の本質の追求というべきものであった。岩猿敏生は「図書館教育の本質の追求を通じて、図書館教育学成立の可能性を考え、これによって図書館学自体の哲学的基礎づけをも企図した」と表現している[(5)]。

さらに小野は、図書館の本質の追究を学問的に行おうとして、図書館学の構想にたどり着き、図書館学の全体的枠組みについて述べた1936（昭和11）年の「図書館学序説」（『図書館研究』９巻３号）を発表している。この当時、図書館学という言葉自体は既に使われていたが、それは目録法、分類法、図書館管理法といった図書館の技術的側面に関する研究にとどまり、小野の言う「図書館学の科学としての独立」を念頭に置いたものではない。小野は、図書館学に対する明確な学問体系を説き、その限界についても述べている。

小野は図書館学を、“図書館の目的ならびに実際機能の本質を論定し、これに基づいてその全面的活動に対する普遍妥当なる規範を与える学である”と定義する。その上で図書館学の体系を図書館そのもの全体にわたる事象を取り扱うものとして「図書館の本質を論定する原理論」「図書館の機能を統率する方法論（図書整理法と図書利用法）」「形式的統制としての行政論」「補助科学部門」の４つに定立している。

岩猿敏生は、この論文で述べられた小野の学問体系が、「ひとつの学問的概念から演繹的に構築されたものではなく、図書館そのものの全体的事象から帰納されたものに過ぎない」と批評しつつ、小野の論文が図書館学の体系を意識的に構想した最初の論文であると評価している[(5)]。

２）図書館史、文庫史研究に関する業績

小野は前項で示す「図書館学序説」の中で、“図書館自体の目的は、図書館発達の歴史的研究から機能されるものであるから、ここに原理論としてまず図書館史が入ってくる。図書館自体の研究は実に図書館史である”と論じ、図書館学における図書館史研究の重要性を指摘している。

そして小野は、1937（昭和12）年に「図書館史論」（『図書館研究』10巻４号）を発表する。さらに、1938（昭和13）年以降も個別的な図書館史研究論文を相次いで発表していく。そして1942（昭和17）年には、わが国唯一の最も本格的な通史である『日本文庫史』（教育図書、434p.）を公刊する。この『日本文庫史』は、昭和17年日本図書館協会総裁賞受賞図書ともなった。さらに２年後の1944（昭和19）年、小野は早くも『日本文庫史研究　上巻』（1944年、大雅道出版、714p.）を著し、わが国における図書館史研究の第一人者としての地位を確立するのである。

『日本文庫史研究』の序文によると、上記の『日本文庫史』は「文庫の存在意義を全く無関心に過ごして来た我が国一般識者に供せんとする啓蒙的意図に出た」ものであるのに対して『日本文庫史研究』は、「著者の研究論文として執筆したもので、之を以て著者今後の研究基礎となすと同時に、又一般の文庫史研究家の研究素材として提供せんとする意図の下に上梓する」ものであると述べている。同書では、上代および中世史を収め、日本文庫史の概念から説き起こし、時代区分を明確にした上で、上代では前史で仏教伝来と典籍の渡来から始まり、図書寮、寺院文庫そして公卿文庫などについて詳細に言及する。また、中世では寺院文庫や公卿文庫に再び言及しているほか、金澤文庫や足利学校をあげて武士の学芸と文庫の章について論述がなされている。『日本文庫史研究』は、当初、全３巻とし、中巻を近世編江戸時代、下巻を近代編明治時代、大正時代、昭和時代を予定していたが、出版社の破産で、中下巻の刊行は沙汰やみとになってしまった。『日本文庫史研究　下巻』（1979年、臨川書店、544p.）は、出版社を変更し、新しく上下２巻として刊行したものである。下巻では、近世に於ける文庫として徳川家康の文献政策とその影響、昌平坂学問所文庫、藩校の文庫、江戸期における国学者の図書館運動などについて一齣触れたあと、明治期の「図書館令」や戦後の「図書館法」や「学校図書館法」に至るまで、近代日本における図書館法規の変遷とその背景についての考察がなされている。

岩猿敏生が、「小野の図書館史研究における歴史観は素朴な生物史観であり、図書館史を構想する歴史観としては不適切なものである」と批評するように[5]、小野の歴史観は生物としての人間の本能といった非歴史的概念を歴史解釈の中に取り込むなどの不完全さも内包してはいる。しかし、戦後のわが国における図書館史研究が明治時代以降にのみ集中していた中で、古代から江戸期に至る期間の個別的な図書館史研究論文をまとめた小野に比肩しうるものは、現在なお存在しないといってよい偉大な成果である。

３）その他の研究

小野は、その他にも広い分野の研究をものにしている。たとえば、1937（昭和12）年に発表した「大学図書館論（『圖研究』10巻２号）は、大学図書館を正面から論じた論文としては、戦前におけるほとんど唯一のものである。小野がこの論文を書いた当時、すでに高等教育機関所属図書館の全国的組織はいくつか結成され活動をはじめていたが、大学図書館の本質論については、小野以外にはほとんど誰も問題視しなかった。小野の先見性を示す事例ともいえよう。小野は、この論文で“大学図書館の本質的究明は、そのまま大学教育の本質的究明でなければならない”とする立場から、大学令中の記述をもとに、大学と初等中等教育機関との大きな相違として、児童生徒は学習活動において他律的、受動的であるが、大学教育では学生は自立的、能動的な学習をするという前提

にたち、このような教育の行われる場が大学図書館であると定義している。小野は、さらに“大学教育は、豊富な資料の中におけるところの自由な合理的研究で、大学教授の使命は単なる事項の伝達ではなく、学生の研究に対して、その目標ならびに方法過程に先輩者としての合理的な示唆を与えることにある。どこまでも覚醒の自学に俟つべきものであり、指導はそのまま検討でなければならない。この点から考えるとき、大学教育は決して講座本意の教室教育であってはならない。大学教育は自学に基づくところの図書館教育でなければならない”と論じている。戦前の日本においては、大学図書館は教師の研究用集書の補完的役割のみを期待されているという状況であり、そのような大学教育および大学図書館像に対して、戦前のこの時代に正面から挑戦し、大学教育の中心に図書館教育を位置づけようと試みたという点は、戦後の大学図書館理念を先取りするものであったといえよう。

また、小野は「漫画図書論」（1958（昭和33）年）という漫画を論じた長文の論文も執筆している。この論文中で小野は「漫画そのものは人類社会においては頗る古い歴史をも持っており、長い間人類生活の中に溶け込んできたものである。これが事実上人類生活に不要、無意義なものであったならば、とっくに淘汰され姿を消していたはずではないか。漫画は一面、どこかに人類生活にとっての不可欠の要素を持っているからだと言えよう。」と漫画の有用論を論じている。さらに、小野は漫画の歴史的な考察にも及び、古代バビロニアや古代エジプトの時代における動物を擬人化した絵画作品から、我が国の「鳥獣戯画」「天狗草子」「風神雷神図」などにも言及している。小野はさらに、米国新聞の漫画欄に対する詳細な統計調査、そしてわが国では毎日新聞社や東京都教育委員会の調査結果も取り上げ、児童漫画に求められる具体的な要件をあきらかにしている。また、逆に良質な漫画についても考察し、児童に悪影響を与えないで、その滑稽やユーモアが自然で率直な童心を明るい笑いで誘うような作品、と定義している。同時に、漫画の教育的弊害は漫画そのものにあるのではなく、その内容と質の問題である、と明快に論じている。小野の「漫画図書論」は、当時はあまり話題にはならなかったが、この論文が示すような内容・見解はその後、わが国の公共図書館、そして学校図書館も次第に漫画を肯定的にとらえるようになった。小野の「漫画論」は、まさに先見の明があった意義深い業績のひとつと考えられる。

その他、『日本蔵書印考』（1943年、文友堂書店、348p.）は、前編「蔵書印の種々相」と後編「古今蔵書印一覧」に大別、各種の蔵書印について詳しい解説と色刷りによる18図ならびに挿図101図から成り立っている。まさに労作そのものと言うべきであろう。

（3）図書館界、図書館学会および社会に関する業績

学会および社会における活動としては、青年図書館員聯盟に所属して理事として、ま

た各種の研究委員として果たした役割をあげなければならない。同聯盟は、主として阪神を中心に新進気鋭の図書館員たちにより、戦前の1927（昭和２）年に結成された。1943（昭和18）年、戦時下の用紙割り当てが30％に削減されたことに端を発し、解散のやむなきにいたったが、同聯盟の理事たちが後代に残した功績は高く評価される。小野は、『日本目録規則1942年版』（NCR）、『日本件名標目表』（NSH）の編纂制定に携わった。また同聯盟の後継ともいうべき日本図書館研究会さらには地元の京都図書館協会の創設にも加わり、副会長、理事のちに顧問となった。他にも日本図書館協会、日本図書館学会、私立大学図書館協会、同志社大学図書館学会等においても理事、評議員、幹事、顧問として活躍している。また、1947（昭和22）年５月より1951（昭和26）年４月まで、京都市市会議員として京都市内の学校図書館の充実に意を注いだのであった[(3)]。同時に当時、京都には、府立図書館はあるが、市立図書館がないことから議会で市立図書館の必要性を説き、その実現にも鋭意努力した。

３、人物・その他

渡辺信一は小野則秋の人柄について、「ひと言で言えば、歯に衣を着せずに天下の悪弊を一刀両断に断ち切る鋭い舌鋒の持ち主であったが、豪放磊落、細かいことには頓着せず、いつも笑みを浮かべた人情家であった。斗酒なお辞せずの酒豪でもあり、総じて九州男児の面目躍如たる風情であった。当時は司書資格交付の権限は文部省の管轄下にあったが、その頃当然のように行われた役人の接待を行うことを潔しとせず、毅然とした態度で臨んだ気骨の持ち主でもあった」と述べている。

〈注〉

⑴　館名ならびに職名は、井上幸俊「小野則秋先生　付・小野則秋先生略歴／業績一覧」『同志社大学図書館学年報』（第14号小野則秋先生追悼号、1989）による。当時、同志社大学図書館は、広く学校法人同志社の傘下にある諸学校も対象とした「同志社図書館」と呼ばれていた。なお、同論文で井上は、小野が同志社大学図書館に転じることができた理由として、同志社出身で当時九州帝国大学附属図書館司書官であった竹林熊彦の仲介があったことも伝えている。

⑵　中村初雄「革新と情熱の図書館人・小野則秋氏を語る」『同志社大学図書館学年報』第14号小野則秋先生追悼号、1987、p2-15

⑶　青木次彦「同志社大学図書館学教育史稿」『図書館学の教育』日本図書館学会研究委員会編、1983、p41-64

⑷　小野則秋はこの辺りの状況について、「同志社大学図書館学会20年の回顧」（『同志社大学図書館学会紀要』第４号、1961、p9-10）で以下のように述べている。

たまたま昭和24年９月、当時私が慣例していた文部省学術奨励審議会学術用語分科審議会の委員として身分関係で、突如中央教職適格審査委員会から教職不適格の判定をうけた。これは私の執筆した図書館関係の論文がヒィヒテの言論やクリークの学説の一部などを引用した国家主義全体主義戦争謳歌の思想であるという偏狭極まる判定で、勿論再審請求をして抗争したのであるが、

再審査で解除された昭和26年の夏までその間完全に同志社大学図書館とも絶縁され、この２ヶ年間はあらゆる学会活動からも隔絶の止むなき次第となった。

⑸　本論は、著者の許諾を得て以下の論文の内容を大幅に直接引用し、加筆再構成したものである。岩猿、渡辺両氏に謝意を表する。

・岩猿敏生「小野則秋の図書館学研究について」『同志社図書館情報学』No.４（『同志社大学図書館学年報』No.19別冊）、1993、p1-14

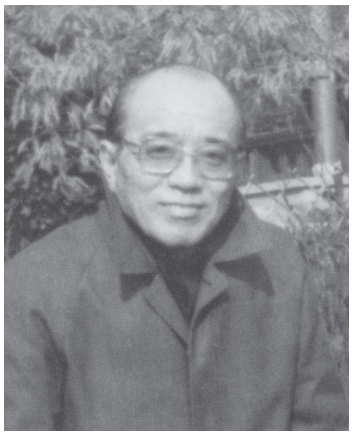
・岩猿敏生「日本図書館学史上における小野図書館学の意義について」『同志社図書館情報学』No.５（『同志社大学図書館学年報』No.20別冊）、1994、p1-19

・渡辺信一「小野則秋の人と業績：同志社時代を中心に」『図書館情報学教育論叢―岩猿敏生先生卒寿記念論文集』京都図書館研究会、2012年６月、p233-247

（原田隆史）

２．吉田貞夫

１、略歴



『彦根論叢』第260・261号より転載
（写真提供：滋賀大学経済学会）

吉田貞夫は、1924（大正13）年６月29日滋賀県に生まれ、1950（昭和25）年３月、同志社大学文学部英文学科を卒業。同年３月、滋賀師範学校附属中学校に勤務。1951（昭和26）年４月滋賀大学学芸学部附属中学校勤務となり、1953（昭和28）年８月同校を願いにより退職、同年９月より1955（昭和30）年８月までアメリカ合衆国アトランタ大学大学院図書館学部に学び、Master of Science in Library Service を取得。同年９月帰国後、大阪アメリカ文化センター図書主任、日本検査株式会社を経て、1957（昭和32）年９月から1959（昭和34）年３月まで大阪市立市岡商業高等学校教諭として勤務した。

1959（昭和34）年４月からは、同志社大学文学部内に開設されていた図書館司書課程の科目を担当する嘱託講師として教壇に立つこととなった。1960（昭和35）年４月には同志社大学商学部および文学部の嘱託講師となり、同年10月より同志社大学文学部専任講師として図書館司書課程を担当することとなった。1964（昭和39）年に助教授となり、さらに1971（昭和46）年には同志社大学文学部教授となった。その間、1969（昭和44）年３月から８月まで日本私立大学連盟在外研修員としてアメリカ合衆国に留学している。1974（昭和49）年２月に同志社大学を依願退職。同年３月より滋賀大学経済学部教授に採用され、1978（昭和53）年４月には滋賀大学大学院経済学研究科の担当教授となっている。また同志社大学から滋賀大学に異動後も1988（昭和63）年まで同志社大学で嘱託

講師として司書課程科目を担当し続けた。1989（平成元）年１月17日、脳腫瘍により逝去、享年64歳であった。生前の業績を受け、逝去と同日付で従四位勲三等瑞宝章の叙勲を受けている。

２、業績

（１）研究面の業績

吉田の研究業績は、その一覧が『彦根論叢』（No.260／261、p387-392）に収載されている通り、３冊の著書と１つの訳書および十数本の論文を発表している。これらの研究業績のうちでも、図書館の機械化・コンピュータ化に関しては、その概念が日本にはほとんど知られていなかった当時から紹介し、また、実現に向けての道筋までを考察してきた先駆的な研究者であった。

なかでも、『情報組織概説』（1976年、法律文化社、241p.）は、経営情報システム（MIS）を日本に紹介した初期の代表的な書物であると同時に、情報管理を「種々の組織体にとって必要な情報を合理的に蒐集し、処理し、これを適切にタイムリーに利用して、組織行動を有効に実行するための情報活動」であると定義しつつ、図書館の役割についても詳細に検討している。この本の中で、吉田は図書館学を図書の管理だけにとどまらず、情報学や情報管理と密接に結びつけられた「情報システムの学際科学」であると述べ、従来の図書館学に加えて、コンピュータ技術も導入した新しい管理運営、情報処理、情報サービスに関する考え方について論じている。このように吉田は、図書を中心とした「物」の物品管理をいかに効果的に行うかということを中心とした図書館学に、情報と主題の概念を中心とした情報管理の重要性を持ち込んだという点で先駆的な存在であるといえよう。『情報組織概説』は、1985（昭和60）年には情報社会と人間との関わりや、情報評価、自然言語処理なども大幅に追記して『情報文化論』（1985年、法律文化社、346p. 宮川清彦との共著）として再刊されている。吉田貞夫の著書『情報組織概説』『情報文化論』は、西安電子科技大学（中華人民共和国電子工業部直轄の大学、旧名西安電訊工程学院）において高く評価され、1983（昭和58）年には同大学より、情報組織学の講義を行うために招聘されている。

また『コンピュータ・ベースの図書館システム』（1979年、法律文化社、323p. L. A. テッド著　田口瑛子との共訳）は、Lucy A. Tedd. “An Introduction to Computer-Based Library Systems”、Heyden & Son Ltd.（1977）の訳書であるが、単にコンピュータを用いた図書館のハウスキーピングだけではなく、SDI サービスをはじめとして現在でも検討中のものを含む先進的な概念について説明している。まだパーソナル・コンピュータが出現した直後で、コンピュータの将来像も見通せていなかった当時に、このような図書に注目して日本に紹介しようとした吉田の見識眼は、高く評価されるべ

きであろう。吉田はこの翻訳書を出版する７年前の1970年には『図書館の機械化とインフォメーション・サービスの現状と展望：アメリカ西部二州の図書館網の開発計画を中心として』（近畿大学短大論集、Vol.２、No.２、p45-78）を執筆し、アメリカ西部の２つの州で計画されていた図書館ネットワークを取り上げ、コンピュータを用いた図書館管理について紹介してもいる。

さらに、1985（昭和60）年には『BASIC による情報検索プログラミング入門』（1985年、法律文化社、272p. 谷口伸一との共著）を著している。この図書で吉田は、コンピュータ導入についての概念的な紹介のみにとどまらず、図書目録の作成・文献検索システム・逐次刊行物の管理・貸出および予約システム・統計表の作成まで、実際の図書館業務を豊富なプログラミングのサンプルを示しながら説明している。図書館という実際の場での例を用いることで、図書館員たち自身がその手で基本的な情報検索の概念を学ぶことを意図した、当時としては他に例をみない図書であった。

情報組織学、図書館情報学および、情報システムに関する中心的な論文としては、以下のようなものがある。１）では1960年代よりコンピュータシステムの導入が行われた米国の図書館事情を論じており、２）および３）では、各種の情報システムについて論じている。また、図書館および情報検索システムにおける用語と自然言語処理の問題については、特に焦点をあてて研究を行っている。４）～８）はその例である。

１）「近世米国図書館発達史」『文化学年報』19号、1973、p100-121
２）「工学と化学領域の情報システム」『彦根論叢』175／176号、1975、p96-112
３）「ヒューリスティックな地域分析を支援する地域情報処理システム・REALS」『彦根論叢』253／254号、1988、p199-221（谷口伸一らと共著）
４）「ドキュメンテーションに於ける自動抄録の諸問題」『人文学』76号、1965、p35-50
５）「社会科学と自然科学文献の書誌学的考察と、主として米国書誌の注解」『人文学』52号、1961、p40-59
６）「情報検索システムにおける索引用語と検索用語について」『彦根論叢』183号、1977、p1-19
７）「情報学の言語学的研究：文献情報管理言語と自然言語の比較研究」『彦根論叢』185／186号、1977、p106-126

このように、吉田の研究業績は情報組織に関する新しい概念を日本にいち早く持ち込み、図書館情報学の中に取り込み整理したという点で顕著である。なお、吉田が提唱した情報組織学を研究する場は、滋賀大学において1977（昭和52）年４月より滋賀大学経

済学部管理科学科（現　滋賀大学経済学部情報管理学科）に「情報組織学講座」として設置された。当時、「情報組織学」という講座名自体が他の国立大学に類例を見ないものであり、その学際的内容に対して多くの大学の注目を受ける存在であった。吉田は、同志社大学を辞した後、同講座の設置に尽力するとともに、同講座担当教授として情報組織学および図書館情報学関係の文献・資料の蒐集、整備につとめ、情報組織学講座の充実・育成にも貢献している。

（２）教育面の業績

吉田は、同志社大学図書館司書課程（以下、司書課程とする）における最初の専任教員であり、1960（昭和35）年着任以来、司書課程開設以来講師として授業を担当してきた小野則秋と共に本学司書課程の基礎を築いた人物として大きな功績がある。吉田が着任した翌年には、図書館法施行規則改定にともなって司書課程開設以来はじめて開講科目の大幅な改正があり、吉田は中心人物として対応にあたっている。また、1970（昭和45）年に小野則秋が定年退職した際には、専任教員を１名増員することに成功し、その時着任した青木次彦とともに司書課程の発展に寄与している。

吉田が同志社大学で担当した科目は、1959（昭和34）年に嘱託講師として担当した「図書館学（各論）」「図書館学（応用論）」「視聴覚資料と教育」を皮切りに、1961（昭和36）年に「図書館学概論」「図書館学通論」「図書館・情報学Ⅰ」（1961～1988年度）、「図書館実習」「図書館演習」（1963～1974、1981～1988年度）、「資料選択整理法」「資料分類法」（1961～1973年度）、「情報管理」「視聴覚教育」（1959～1973年度）、「学校図書館学概論」「学校図書館通論」（1962～1970年度）などの幅広い科目を担当した（年度によっては担当しない年もあった。詳細については、本誌資料編を参照されたい）。また、これらの科目以外にも、年度によっては「図書館活動」「参考業務」「図書館史」「図書館資料論」などを担当することもあった。

教育内容の点で特に注目すべきであるのは、先端の情報技術を取り入れるなど、最新の状況にも対応した授業を展開したことであろう。たとえば、『コンピュータ・ベースの図書館システム』が刊行された1979（昭和54）年度の同志社大学「図書館・情報学Ⅰ」の授業では、この本の内容も取り組む形で授業が行われ、既にその年において図書館のコンピュータ化とコンピュータネットワークの概念についての説明が講義されている。吉田は、その授業の中で図書館システム専用のコンピュータの導入だけではなく、汎用のソフトウェアを用いた図書館管理についても触れるなど、単に図書館にコンピュータを導入するというだけではなく、将来にも通じる考え方の変化を強調している。また、1981（昭和56）年度からは、渡辺信一らと共担の「図書館演習Ⅰ」の授業において、当時は非常に高価であったパーソナルコンピュータを用いて、学生自身にBASICを用い

た資料管理のプログラム技法（アルゴリズム）を学ぶ演習を行わせるなど、教育面でも先駆的な試みを展開している。

これらの授業が行われていた当時は、図書館の現職者や教育者でも、日本図書館研究会で小野泰正を中心としてライブラリー・オートメーション研究会（LA 研）が設置されて図書館に対するコンピュータ導入の問題が検討されていた程度で、まだまだ図書館とコンピュータという組み合わせに対する理解は得られていない時期であった。日本において図書館に対するコンピュータの導入が本格的に行われはじめるのは1980年代にはいってからである。1970年代から将来の図書館員となろうとする人々に対して、アルゴリズムまで含めた実際的な授業が行われていたというのは、その後の図書館システムの発展を考えれば画期的な状況であり、卒業生に対しても近年の変化に対応する下地を早い時期に提供することができたといえよう。

このように、吉田は同志社大学図書館司書課程に、いわゆる情報学的側面を取り込み、図書館情報学分野へと近代的展開を果たした人物であると評することができる。2012（平成24）年度より図書館司書課程で教えるべき科目として「図書館情報技術論」が必修となったが、同志社大学図書館司書課程では、吉田の担当科目を中心として30年以上前から同内容の科目を展開している。これもまた吉田の先見性を証明するものといえよう。

３、人物・その他

吉田の授業における口調は、抑揚がついていて単語間の区切りがはっきりしたしゃべり方であった。また、ひとことひとこと噛みしめるような語り口で非常にわかりやすく親しみを感じるものであった。自分の信念に基づく行動は果断で、留学したり、新しい世界を求めていくつかの職場を変わるなど、行動的であったが、一面でやさしい人格者でもあった。受講生を自宅に招いて食事会を開催することもあったが、ご子息まで含めて和気藹々とした雰囲気が醸し出され、吉田の人柄そのまま明るい家庭を感じさせるものであった。

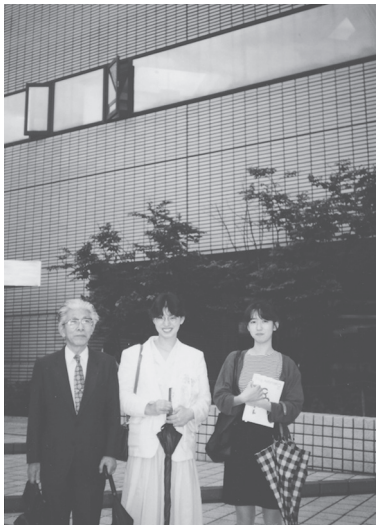
吉田貞夫先生（左）、渡辺信一先生（右）

（原田隆史）

３．青木次彦

１、略歴

青木次彦は、1922（大正11）年、京都市に生まれた。京都府立三中を経て、国学院大学国史学科に入学し、1944（昭和19）年９月卒業した。在学中、学徒出陣した。戦後、京都大学国史研究室嘱託となった。この時期、西田直次郎博士に師事し、小倉親雄と親交を結んだ。小倉は、同志社図書館司書を経て、京都大学附属図書館事務長、京都大学教育学部教授等を勤め、青木に学問的、精神的影響を与えた。青木は、1948（昭和23）年９月同志社書記として入社し、主に大学図書館に長く奉職した。閲覧課長在職中の1970（昭和45）年４月図書館司書課程担当の専任教員として文学部文化学科の専任講師に任用された。以後、助教授、教授をへて、1988（昭和63）年３月定年退職するまで、18年にわたり本学図書館司書課程の教育と研究面で大きな貢献をした。



「大阪府立国際児童文学館」見学
（1987．６．９）

学問的業績については後述のとおりであるが、小野則秋、吉田貞夫が基礎を築いた図書館司書課程（以下、司書課程とする）を現在の形に仕上げたのは青木の最大の業績である。18年にわたり常に設置科目の改革に意欲的に取り組み、現在見るように全国的にもトップレベルの司書課程を築いたのも青木の功績である。また本学の図書館情報学の学問的拠り所である紀要『同志社大学図書館学年報』（1975年より）の創刊に尽力したのも青木であった。

温厚で紳士的な性格で多くの学生に慕われた。また18年の間に多くの有為の司書を養成したが、それは青木に育てられた本学出身の司書が現在全国の多くの図書館現場で活躍していることが証している。青木は、2009（平成21）年２月８日、逝去した。享年86才であった。

（参考文献：渡辺信一「追悼の辞　青木次彦先生の逝去を悼む」『The Doshisha Times』第642号、2009．３．15）

２、業績

青木の業績を概観すると、まず同志社大学における図書館学教育における発展期を形成した功績が大きい。次に、研究面での業績もそれに劣らず大きいものがある。特に研

究面では、書誌学、日本図書館史、同志社大学図書館学教育史の３分野で業績があった。すべて一見地味な研究であるが、多くの論考がその分野の基礎的研究に注力されており、綿密な考証と真摯な追求の上に成り立っているのが理解できる。ほとんどが歴史的基礎研究なので、今後も色あせることなく、参照、引用されていくものと思われる。書誌関係は青木が司書としての資質をもっとも発揮した分野で、多くの情熱を注いだ分野であり、中でも『新女界』の書誌を始めて完成させた功績が大きい。次に、日本図書館史の諸論稿の中では、「公共図書館小考」と「“図書館”考」が青木の学問的姿勢と研究方法論をもっとも明確に表出した代表論文と思われる。この二論文は多くの新しい事実の提示と独自の見解が表明された労作であり、研究方法を含めて多くのものを学ぶことができる。また同志社大学図書館学教育史は原資料をふまえて綿密にかつ系統だってはじめて通史として描出したことは、教育面においても研究面においても後学にとって大きな贈り物となっている。今後わが大学の図書館学教育を発展させていくための礎となる研究成果と思われる。

（参考文献：「青木次彦先生略歴並びに主要業績」『文化学年報』37号、1988）

（１）教育面の業績

業績の筆頭に挙げられるのは教育面であり、本学司書課程の基礎を築いた小野則秋と吉田貞夫の後を継いで現在の司書課程を発展させた功績が大きい。前二者が本学司書課程の創設および基礎固めの功労者とするなら、青木はその基礎の上に発展期を作った功労者と言えよう。青木は、1970（昭和45）年４月に着任以来、吉田の良き同僚として、図書館学教育を大学教育の中で確固とした位置づけを得るために尽力した。そこには図書館学そのものの学問性の確立への努力だけでなく、大学当局および教授会との関係などで苦慮する場面も多かったようであった。

またもっとも重要な設置科目については、「図書館法施行規則」（省令）の度重なる改正に合わせて本学の設置科目、単位数を改正していった。1970年代以降の司書資格取得の要件単位の基本が成立するのが1968（昭和43）年３月の省令改正であったが、本学では総設置科目・単位数を14科目30単位とし、省令に準じて必須・選択を定め合計24単位以上の履修を司書資格の必要条件とした。1974（昭和49）年さらに改訂されるが、これは青木が着任以後のことで、吉田のよき協力者となって改定作業に当たり、その後の課程充実の端緒を切り開いた。この時より司書課程科目は、「図書館・情報学Ⅰ」（旧「図書館通論」「情報管理」）「図書館・情報学Ⅱ」（旧「資料目録法」「資料分類法」）「図書館・情報学Ⅲ」（旧「図書館活動」「参考業務」）「図書館・情報学Ⅳ」（旧「図書館資料論」「人文科学および社会科学の書誌解題」）「図書館資料演習Ⅰ」「図書館演習Ⅱ」「図書館史」「図書館学特論」「資料整理法特論」「社会教育学」「社会調査」「視聴覚教育」となった。

青木が本学の図書館学教育に直接関与するようになったのは、二十才代末の大学図書館員時代からで、その最初は1950（昭和25）年の「同志社大学図書館学講習所」の第五回「講習所」開設の時であった。担当は「目録編成法」であった。青木は1970（昭和45）年就任以来、「図書館演習」（1970年度～1987年度）、「図書館・情報学Ⅰ」（旧「図書館通論」「情報管理」）」（1976年度～1977年度、1981年度～1984年度）、「図書館・情報学Ⅲ」（旧「図書館活動」「参考業務」）」（1970～1987年度）」「図書館・情報学Ⅳ」（旧「図書館資料論」「人文科学及び社会科学の書誌解題」）」（1975年度～1976年度）「図書館史」（1975年度～1987年度）「図書館学特論」（1975年度）を担当した。

前任の吉田は1960（昭和35）年10月本学司書課程の最初の専任教員となったが、1970（昭和45）年４月より１名が増員され青木が専任講師として着任し、以後現在までの司書課程担当専任教員２人体制が確立した。その後青木は、吉田退職の後任として渡辺信一（京都産業大学専任講師）を本学の専任講師として迎えるのに尽力し、課程の円滑な運営を実現した。

（参考文献：青木次彦「同志社大学図書館学教育史稿」『図書館学の教育』日外アソシエーツ、1983、『同志社大学図書館学年報』1975年～1988年）

（２）図書館司書課程の紀要の刊行

青木の大きな業績の一つとして、1975（昭和50）年創刊の『同志社大学図書館学年報』がある。青木が学内外に対する司書課程の活動報告と論文などの発表の場及び卒業生とのコミュニケーションの手段を兼ねて刊行したものである。本誌の刊行につき、学長をはじめ財政部門の理解が得られたのも、これまでの学外における司書課程履修者の実績があったことは勿論であるが、青木の人柄、経営手腕に負うところも大きい。創刊号には、松山義則学長のメッセージが寄せられ、「同志社大学の図書館学がさらに新しい装いを加えられて発展されるよう心から願っています」と熱いエールが送られている。本年報の以後の充実ぶりを見れば、この期待にいささかは応えられていると思うのである。

（参考文献：青木次彦「思い出すままに―『年報』創刊のころ―『同志社大学図書館学年報』20号、1994）

（３）研究面での業績

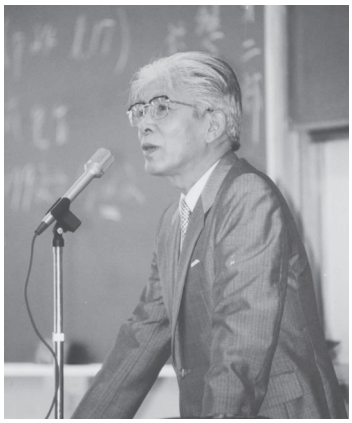
１）同志社大学図書館学教育に関するもの

（編著書）

①日本図書館学会研究委員会編『図書館学の教育』（論集・図書館学研究の歩み　第３集）日外アソシエーツ、1983年

「同志社大学図書館学教育史稿」p41-64

（1941（昭和16）年４月の「同志社大学図書館学研究会」の発足以降、「同志社大学図書館学講習所」を経て1952（昭和27）年４月の「司書課程」の成立とその後の発展過程を通観したものである。1980年代前半までの本学の図書館学教育の歩みが記述されている。各種の原資料をふまえ、主観を排しできるだけ正確に歴史をあとづけ、本学図書館学教育の特質を明らかにしようとした論考である。この論文と次の『同志社大学図書館学年報』論文とを合わせたものが、本学図書館学教育について書かれた論文の中ではもっともまとまったものとなっている。（本論文は、本号の第一部第一章に収載されている。）



青木次彦先生

（論文）

①「同志社大学図書館学研究会について―同志社大学図書館司書課程30年史史料（その１）」『同志社大学図書館学年報』８号、1982、p94-100

②「同志社大学図書館学講習所の創設―同志社大学図書館司書課程30年史史料（その２）」『同志社大学図書館学年報』９号、1983、p84-91

③「第２回同志社大学図書館学講習所の開設―同志社大学図書館司書課程30年史史料（その３）10号、1984、p70-74

④「同志社大学図書館学講習所第３回―第６回の記録―同志社大学図書館司書課程30年史史料（その４）」『同志社大学図書館学年報』11号、1985、p76-95

⑤「同志社大学「図書館学」の開講―同志社大学図書館司書課程30年史史料（その５）」『同志社大学図書館学年報』12号、1986、p86-96

⑥「同志社大学「図書館司書課程」発足とその後―同志社大学図書館司書課程30年史史料（その６）」『同志社大学図書館学年報』13号、1987、p70-79

（①から③は、本学の「図書館司書課程」の前史をなす「同志社大学図書館学研究会」（戦後「同志社大学図書館学会」となる）と「同志社大学図書館学講習所」の活動を扱ったものである。①では、1941（昭和16）年４月から1945（昭和20）年12月までの全38回にわたる研究記録を『図書館学研究会記録』から、月日、発表者、題目を中心に収録している。最初は館員の資質の向上、図書館の本質理解、書物に対する認識、学問研究法の習得をめざして臨時の講習会として出発、しだいに常置の研究会となり、公開の研究会に発展した経緯が記述されている。戦時期に、毎月一回のペースで図書館をめぐるさまざまなテーマが地道に研究されていた情熱に感銘をうける。②～④は前記の研究会活動を引き継いで1946（昭和21）年から1951（昭和26）年まで開講された「同志社大学図

書館学講習所」の記録である。この講習所は、戦後日本における図書館員の研修・養成機関としてもっとも早く設立されたものとして日本図書館史、日本図書館学史、日本図書館学教育史に名を残している。『同志社大学図書館学講習所趣意書』や『募集要項』『申込書』などの原資料から、講義題目、講師、単位、時間数、講義用テキスト名などが収録されている。また修了者名も記録されている。『趣意書』には、新生日本の文化を図書館の立場で担おうとする希望と決意がつよく表明されている。本講習所は多くの有能な図書館員を輩出したのであるが、運営に関与した先人達の苦労がしのばれる資料が多く収録されている。⑤は、「講習所」から正規に司書課程が発足する転換期について述べられている。まず研究会主催の「講習所」から大学の正規教育である「夏期大学」に図書館学科目が設置された1951（昭和26）年の状況が述べられ、続いて1952（昭和27）年に文学部に「図書館学」が自由選択科目として開講され、正式に司書課程が発足した時期の資料が紹介されている。⑥は、1953（昭和28）年から1955（昭和30）年にかけての司書資格取得科目が文学部の「自由選択科目」、教職課程の「専門選択科目」、夏期大学に分散していた複雑な状況が、『同志社大学要覧』『同志社夏期大学』『同志社大学夏期大学図書館学聴講案内』などの資料で明らかにされている。この体制は1960（昭和35）年度まで続き、すべての司書課程科目が文学部文化学科に統合、再編されるのは1961（昭和36）年度以降である。したがって①から⑥の記録は、現在の司書課程の体制が固まる1960（昭和35）年度以前の歩みをはじめて原資料をもちいて丹念にあとづけたものとして評価できよう。

２）日本における大学図書館及び図書館学担当教員について論じたもの

①「私立大学図書館」（最近10年における図書館学の発展（特集）第２部図書館の歴史）『図書館界』19巻４号、1967. 11、p169-171

②「わが国の図書館学担当教員の現状―日本図書館協会図書館学教育部会昭和52年調査を中心に―」『同志社大学図書館学年報』８号、1982、p37-43

（『図書館学教育担当者名簿　昭和52年調』（日本図書館協会、1978）を中心に日本の国公私立大学における図書館学担当教員の年齢構成や出身大学について分析したものである。）

３）「図書館」及び「図書館学」の発展過程を歴史的に論じたもの

①「“公共図書館”小考」（志賀英雄先生古稀記念号）『文化学年報』28号、1979. ３、p35-55

（本稿は、わが国において「public library」の造語として「公共図書館」という用語が生まれるまでの幕末から明治初期にかけての翻訳の流れを原典をあげながら考究した

ものである。また近代図書館の「public」の意味が無料公開、公費支弁などにあることをわが国の公共図書館思想の導入の中でどのように認識、受容されていったかを追及している。本稿は、欧米のパブリックライブラリーという言葉が、早くも1850年代より「公共書庫」「公共書籍館」「公同大積書庫」などと訳されてきたことを指摘している。またわが国の18世紀後半からも私文庫を多数の利用者に公開したいわば「公開文庫」の事例があったことも指摘している。さらに欧米の国立図書館や公立図書館が無料公開を原則としているという認識は、明治初年の『特命全権大使　米欧回覧実記』以後の各種の視察報告などでより明確に把握されていったことも指摘している。さらに明治５年の文部省博物局の「書籍館」（有料公開）から明治８年の「東京書籍館」（無料公開）などわが国に登場した現実の国立、公立図書館の諸相の中で無料公開という思想と制度がどのように確立していったかを考究しており、示唆に富んだ論考である。）

②「“図書館”考」『文化学年報』23／24号、1975．３、p33-63

（本稿は、日本の明治10年代に造語された「図書館」という言葉が使われるようになる前に、特に幕末、明治初期にどのような言葉が欧米の近代図書館をさす「library」の訳語として使われていたかを考察したものである。著者は「図書館」という言葉が近代日本図書館史や図書館学の中で今まで詳細に検討されてこなかったという問題意識に立って、幕末、明治期の多くの原典に当たってその真相を明らかにした。結論として、それまで一般的に使われていた「文庫」という言葉は、幕末期に欧米に派遣された幕府、藩の使節、従者、留学生などの見聞録ではほとんど使われず、「書庫」ないしその類語が多く使われたことをはじめて文献上で明らかにした。すなわち当時の見聞録には、「書庫」のほか「書院」「書籍館」「書物庫」「書蔵」「読書楼」「書蔵所」「蔵書庫」「典籍貯所」がライブラリーの訳としてあてられており、もっとも多く使われたのが「書庫」という言葉であることも明らかにした。また同時に福沢諭吉が『西洋事情』（1866）の中で訳した「文庫」という言葉は例外であったことも明らかにした。そして「書庫」が訳語とされた理由を、従来の「文庫」（ふみのくら）という未分化の文献一般をさす「ふみ」とするより当時本を一般的にさす言葉であった「書物」の「庫」として「書庫」という言葉を使ったこと、また西洋の図書館の近代的な機能をまだ十分には理解するにはいたっていないが、「文庫」とは比較にならないほどの量を収蔵し、しかも世界各国の図書を集め、各国の各地に数多く設けられている異質の存在として欧米のライブラリーを認識し別の用語として「書庫」を使ったと指摘している。また箕作阮甫『八紘通誌』（1851年）の中でロンドンの大英博物館図書館、オックスフォード大学のボドリアン図書館をさして「公共書庫」という言葉が使われていることを指摘し、日本の文献に「公共書庫」すなわち「公共図書館」という用語が使われた最初であったという指摘をはじめておこなった。）

③「図書館学事始め」『同志社大学図書館学年報』１号、1975、p26-33

４）図書館の歴史上の事項について論じたもの

（編著書）

『図書館学とその周辺　天野敬太郎先生古稀記念論文集』巌南堂、1971

「近代日本図書館史覚書」p71-82

（論文）

①「文部省出仕市川清流研究覚書」『同志社大学図書館学年報』２号、1976、p37-47

（明治５年８月設置の文部省博物局「書籍館」は日本の近代図書館史の幕開け的意義をもつ国立図書館であったが、その設置の原因の一つとなったのが「市川清流」の建白書『書籍院建設建白書』であった。したがってこの建白書のもつ歴史的意義は大きいのであるが、その筆者・提出者である市川清流がどのような人物なのか従来ほとんど不明であった。本稿は、筆者の「“図書館”考」でも指摘されていることでもあるが、この市川清流が裏田武夫・小川剛が「明治・大正期公共図書館研究序説」（『東京大学教育学部紀要』８号、1965）の中で推定した慶応２年の幕府英国留学生市川森三郎ではなく、文久２年幕府遣欧使節副使松平石見守康直の従者で渡欧日記『尾蠅欧行漫録』の著者でもある文部省の大学大写字生や編輯局11等出仕を歴任した「市川渡」と同一人物であることを究明した意欲的な論文である。）

②「明治初期翻訳教育書と図書館―「米国教育年表」を中心に―」『同志社大学図書館学年報』５号、1979、p20-26

③「図書館の歴史　私立大学図書館」『図書館界』19巻４号、1968. １、p169-171

５）目録法について論じたもの

①「近代目録法研究序説」『人文学』129号、1976. 12、p1-26

②「目録の記録性と検索性」『人文学』132号、1978. ５、p1-30

（本二論文は、ながく著者の問題意識にあった目録の記録性と検索性の問題を標目、記入、記述、排列の歴史を概観することによって究明し、ひいては目録の目的を問おうとしたものである。そのために①では、西洋の古代から中世、そして近代へと発展してきた目録の歴史的側面を概観することによって目録や目録法の本質に迫ろうとしている。②は、特に目録の記録性と検索性に焦点を当てて理論的解明を試みた労作である。）

６）読書論

①「日本人と読書」『同志社大学図書館学年報』３号、1977、p23-28

７）書誌について論じたもの

（編著書）

①青木次彦編著『「新女界」解説・総目次・執筆者索引』友愛書房、1975、86p

（論文）

②「『国民の友　第一集』の出版とその周辺」『磨研録』（私立大学図書館協会西地区部会研究紀要）５号、1968. ４、p70-77

③「湯浅半月覚え書」『日本古書通信』291号、1968. ７、p4-6

④「「国民之友第１～４集」の書誌学的研究」『文化学年報』19号、1971. ３、p12-37

⑤「「新女界」総目次　付「新女界」刊行一覧表（１巻１号～11巻12号（明治42年４月～大正８年２月））『人文科学』１巻３号、1971. 12、p129-220

⑥「「不如帰」の翻訳本と関連書誌（含「徳富蘆花『不如帰』翻訳本書誌試稿」）」『文化学年報』21号、1972. ４、p1-21

⑦「半月湯浅吉郎書誌」『同志社大学図書館学年報』４号、1978、p39-53

８）その他（ガイドブック、通信などに執筆したもの）

①日本図書館協会編『図書館ハンドブック』日本図書館協会、1952

「蔵書の管理」p371-381

（本書は日本図書館協会が創立60周年記念として、図書館事業の企画や図書館員の日常業務の簡便で信頼できるハンドブックとして出版した最初のものである。青木は、「図書の整理と保管」の中で、「蔵書の管理」部分を執筆した。執筆の内容は、蔵書管理の意義、保管と運用の背馳作用、図書の集中保管と分散保管、資料保管の場としての建物管理、蔵書の排架、蔵書の点検、蔵書の愛護と障害、消毒と防虫・殺菌・防腐剤、図書の手入れにわたっており、蔵書管理の基本部分が正確におさえられている。）

②日本図書館研究会編『大学生と図書館』日本図書館研究会、1981

「（第５章　第２節）　基本的参考図書とその利用法　人文科学」p79-96

（本書は、以後数年に一回と改定されていくが、本書は大学生の図書館利用のための入門書として編纂された最初のものである。大学生が図書館の利用に当たって、最初に知らなければならない文献は参考図書であるが、その中でも基本となるものを厳選し、社会、人文、自然と分け、青木は人文科学の分野を担当、主要な参考図書を取り上げ、利用方法について簡潔な解説を付している。）

③「Library is public」『同志社大学図書館学会だより』14号、1958、p4

９）図書館学関係以外のもの

①「京都廃常住寺小考」『史迹と美術』19巻３号、1949. ５、p87-98

（４）対外活動における貢献

青木の第四の業績としてあげなくてはならないのは図書館界への貢献である。その中でも戦前の「青年図書館員聯盟」を継承し、1946（昭和21）年１月に設立された「日本図書館研究会」の事務を1949（昭和24）年10月から1952（昭和27）年の半ばまで３年間担当したことである。研究会理事であった小野則秋同志社大学図書館主任が事務局を引き受け、大学図書館に事務局が置かれ、その実質的事務を青木司書が担当したのである。戦後直後ですべての物資が不足していた時代に機関誌『図書館界』や『日本図書館学叢書』『日本図書館研究会ブックレット』などの刊行事務、通信事務などの苦労を背負った。また理事会、総会、例会などの準備もひとかたならぬ苦労があったようである。詳しくは参考文献にゆずるが、一つの全国規模の研究会を維持するには、いつの時代にも誠意と情熱と知識のある「縁の下の力もち」的人物が必要であることを教えられるのである。青木もそれにふさわしい人であったと思える。（参考文献：青木次彦「回想　同志社大学図書館内事務所時代」『図書館界』48巻４号、1996. 11、p.250）

３、人物・その他

同僚として青木と長く同志社大学図書館司書課程を支えた渡辺信一は、青木との思い出について以下のように述べている。

「青木は、単に研究者としてだけでなく教育者としても得がたい人物で、恵まれない学生や辛い毎日を送る助手たちにも声をかけ、しばしば居酒屋へ励ましに連れて行くなどしていた。大学紛争時代、全共闘の学生と折衝する学生主任には、二度にわたって選ばれた。さらには教職員組合の全学の委員長にも選出されたのは、まさに青木の経歴や人柄によるものであった。青木は40年間にわたり、ひたむきに同志社を愛し、同志社に奉職した。学部の規定で青木は65歳で定年を迎えようとする少し前に『わしゃ、すっかり同志社人や』とにっこりと、そして誇らしげに語った。その時の青木の温顔を私は忘れることができない」（渡辺信一「追悼の辞　青木次彦先生の逝去を悼む」『The Doshisha Times』642号、2009. ３）

（宇治郷　毅）

４．渡辺（邉）信一

１、略歴

渡辺信一は、1934（昭和９）年12月沖縄県生まれ。1953（昭和28）年３月、愛媛県立新居浜東高等学校を卒業後、同志社大学文学部英文学科に入学。1958（昭和33）年に大学を卒業した後、京都府教育庁主事として京都府立図書館に勤務した。1963（昭和38）

「関西大学図書館」見学
（2002．３．18　津島里奈氏提供）

年４月からは京都府立嵯峨野高等学校教諭（英語科）、1967（昭和42）年４月から京都教育大学附属高等学校教諭として英語を教えた。京都教育大学附属高等学校教諭の在職中、ハワイ大学東西文化センターの公費留学生試験に合格して米国連邦政府奨学金を得て、1970（昭和45）年１月より1971（昭和46）年８月まで米国州立ハワイ大学大学院図書館学研究科修士課程（The University of Hawaii, Graduate School of Library Studies）に学んだ。渡辺は1971（昭和46）年８月にMLS（Master of Library Studies）の学位を得て帰国後、1972（昭和47）年４月より京都産業大学教養部専任講師として図書館学および英語を担当した。そして、退職した吉田貞夫の後任として1975（昭和50）年４月より同志社大学文学部専任講師として着任した。1976（昭和51）年には助教授、1982（昭和57）年には教授に昇進、さらに2001（平成13）年からは同志社大学院文学研究科博士後期課程教授となった。2005（平成17）年３月、同志社大学を定年退職。同志社大学在任中から、京都教育大学教育学部、京都大学教育学部、奈良女子大学文学部、佛教大学などで非常勤講師を、放送大学で客員教授をつとめた。同志社大学退職後も、佛教大学非常勤講師、放送大学客員教授などをつとめ、現在も滋賀文教短期大学非常勤講師などで図書館学教育の職を続けている。

学会活動としては日本図書館研究会を学会活動の中心としており、1977（昭和52）年には、日本図書館研究会の理事に選ばれている。以来、長年に渡り理事として活躍し、その間、機関誌『図書館界』の編集委員長をはじめ、いくつかの委員として活躍、同研究会の今日の発展に大きく寄与した。また、1982（昭和57）年には日本図書館協会図書館学教育部会の幹事、1993（平成５）年からは部会長に選出され、図書館学教育カリキュラムの制定に大きく貢献した。この図書館学教育部会長に東京地区の教員以外が選出されたのは、渡辺が最初である。彼は部会長を２期勤めた。さらに、我が国における図書館学研究の全国的な学会であり、1953（昭和28）年に発足した日本図書館学会（現日本図書館情報学会）や、1998（平成10）年に設立された日本学校図書館学会においても渡辺は評議員、理事として、図書館情報学の発展に寄与している。

２、業績

渡辺の業績を概観すると、同志社大学における図書館学（図書館情報学）教育を確立し、興隆へと導いた功績が特に顕著である。また、学校図書館および図書館学教育に関

する研究面での業績も大きい。

（1）教育面での業績

渡辺の業績で筆頭に挙げられるのは教育面であり、小野則秋が立ち上げ、吉田貞夫・青木次彦が発展させてきた同志社大学図書館司書課程（以下、司書課程とする）を、当初は青木次彦とともに、また後半では大城善盛とともに隆盛させた大功労者と言えよう。渡辺の本学司書課程での教育面での功績は多岐にわたる。現在の司書課程で行われている行事の多くは、渡辺がはじめたものが数多い。顕著である事項をいくつか列挙しただけでも以下があげられる。

1）司書課程カリキュラムの整備と開講クラスの増設

渡辺は同志社大学に着任する前の1972（昭和47）年度より３年間、本学の嘱託講師として「学校図書館通論」「人文科学及び社会科学の書誌解題」「図書館演習Ⅰ」を担当した後、1975（昭和50）年度、滋賀大学に転じた吉田貞夫の後任として、同志社大学文学部専任講師として着任した。渡辺が着任した直後の司書課程は、必修科目を整理して「図書館・情報学Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」にまとめるなどした時代であり、図書館法で定められた単位数を大幅に上回る24単位以上での教育を標準にするという形が整備された時期であった。

渡辺が着任した時期、同志社大学における司書課程のカリキュラムはある程度整備されつつあったが、その開講形態は多様であり、Ⅰ部（昼間部）の授業のみで開講されている科目もあれば、Ⅱ部（夜間部）で開講されている科目、夏期大学（夏期講座）で開講されている科目もあるという状況であった。同志社大学においては、全学部の学生が司書資格を取得することができるようになっていたため、各学部の必修科目との時間割上の重なりは不可避であり、司書課程における必修科目と学部の必修科目とが重複するために履修できないなどの事態も発生していた。渡辺は、このような状況を改善するため、多くの科目の複数クラス開講に尽力している。すなわち、多くの科目をⅠ部（昼間部）だけではなくⅡ部（夜間部）でも開講するとともに、Ⅰ部においても複数クラス開講する科目を増やしている。そのために、渡辺自身が「図書館概論」「資料組織法」「図書館演習」「学校図書館」などの多くのクラスを担当するほか、数多くの嘱託講師に依頼することで、これを実現した。クラスの増設は、非常勤講師の手配、学内折衝など多くの労力が必要となるが、渡辺は学生自身の受講機会を増やすために、これを実現している。現在も、同志社大学図書館司書課程では、必修科目全てについて複数クラスを開講しており、中には５クラスを開講する科目さえ存在する。

2）司書課程における演習内容の強化、授業内容の多様化

司書課程教育におけるコンピュータ演習の導入は、1981（昭和56）年度という非常に早い時期から行われている。コンピュータ演習の導入そのものは、当時嘱託講師として「図書館演習Ⅰ」（Ⅰ部）を渡辺と共担していた吉田貞夫の進言によるところが大きかったが、まだコンピュータが非常に高価であり、またコンピュータを図書館で活用すること自体が珍しかったこの時代に、多額の予算を確保し、かつ文系学生を対象としたカリキュラムの中に整合性ある形で組み込んだことは、専任教員である渡辺の努力なしには成立し得ないことであった。

また司書課程において、さまざまな授業におけるゲスト・スピーカーとして現職の図書館員を招いた講演がたびたび組み込まれるようになったのも渡辺の尽力によるものであった。実際の図書館員や図書館に関わる企業で働く人々に来ていただくことは、司書課程で学ぶ学生の興味を高め、学習意欲を高めるという意味で大いに役に立つことである。しかし、実施にあたっては教員自身の幅広い人脈を必要とし、また予算的な措置その他、煩雑な事務手続きが必要となる。渡辺は、多くの卒業生を図書館員に育て上げたほか、自身も学会・協会活動などを通じて多くの人々とのつながりを持ち、様々な人々に担当していただく道を開いたのである。

さらに、ゲスト・スピーカーを依頼するだけではなく、渡辺は実際の図書館現場に対する見学会なども積極的に取り入れている。同志社大学の図書館だけではなく、京都大学をはじめとする国公私立大学図書館や、さまざまな公共図書館、学校図書館に対する見学会の実施は、従来から行われていた図書館現場演習とともに、学生の図書館に対する興味を高めることにもなり、これをきっかけとして図書館司書を目指した学生も多い。

３）図書館ガイダンス、図書館講演会の実施および定期開催

前項で述べた図書館等現職者による講演は、科目の枠をこえて司書課程全体にわたる行事である図書館ガイダンスへと発展することになる。1984年のホームカミング・デー開催を機に検討され、1991（平成３）年度からは定期開催されるようになった図書館ガイダンスは、同志社大学卒業生の公共図書館、大学図書館、学校図書館、専門／国立国会図書館、図書館情報学大学院在学者、それぞれ数名ずつを招き、各館種ごとに分かれて講演、質疑応答、説明会が行われるイベントとして現在も続けられている。この図書館ガイダンスには、３回生４回生を中心に、現在も毎年100名前後の学生が参加し、実際に図書館司書を目指す学生にとっては、またとない情報収集の機会、学習の場ともなっている。

さらに、図書館ガイダンス以外にも毎年１～２回の頻度で、著名な図書館情報学関係者を招いての講演会も実施されている。1980年代からは司書課程の公式な行事となり、制度的にも整備された特別公開講演会として卒業生などにも公開され、『同志社大学図

書館学年報』にもその内容が掲載されている。講演者の顔ぶれは当初より多彩で、津田良成氏（1992年／当時、慶應義塾大学名誉教授・愛知淑徳大学教授）や高山正也氏（1998年／当時、慶應義塾大学教授）などの研究者から前川恒雄氏（1980年／当時、滋賀県立図書館長）、宇治郷毅氏（1997年／当時、国立国会図書館逐次刊行部長）らの図書館員、さらには海外からもロバートM・ヘイズ氏、マイケル・ゴーマン氏、アン・サイモンズ氏ら、錚々たる人々が講演を行っている（資料編「５．図書館司書課程特別講演会等一覧」参照）。この司書課程の特別講演会は現在も毎年行われており、多くの人を集めている。岩猿敏生は、このような講演会について「彼（渡辺信一）はまた国内外の優れた図書館学者を招いて、学生だけではなく、広く学外にも公開した講演会を開催している。こうしたことが可能であるのは、彼の各方面にわたる幅広い人脈によるところが大きい。関西の司書課程を持つ大学で、このような活動を展開しているところは数少なく、関西地区の図書館情報学教育に大いに貢献している。」と評している[1]。

「国立国会図書館」見学
（2002．８．10　津島里奈氏提供）

「国際子ども図書館」見学
（2003．９．26　平野智美氏提供）

東京地区図書館見学会での東京在住卒業生との懇親会
（2003．９．24　平野智美氏提供）

４）中部・東京地区図書館見学会の実施

前々項で述べた各図書館の見学会も、より広範な形での運用がなされている。1990（平成２）年度には司書課程の公式な行事として中部地区図書館見学会が行われ、翌1991（平成３）年度には東京地区図書館見学会が開始された。以後、主として東京地区に存在する国立国会図書館や、慶應義塾大学をはじめとする各大学図書館、慶應義塾幼稚舎図書室などの学校図書館、東京子ども図書館などの専門図書館、福音館書店などの出版社、さらに㈱図書館流通センターなどの図書館に関連する企業など、毎年数箇所を選んで見学が行われた。

中部・東京地区図書館見学会は、図書館実習とは別の意味で学生の興味を高めるための工夫として有効であったといえよう。また、見学会には現役の図書館司書課程受講学生だけではなく、卒業生も参加する形で行われたことも多かった。さらに東京地区では在住の卒業生にも呼びかけて懇親会が行われたこともあった。各種の図書館を見学すること自体が学生にとっての大きな経験となるだけでなく、先輩方との交流という意味でも有意義な教育活動であるといえよう。渡辺は、このような現職者とのふれ合いの場を提供する形での教育を数多く行っているが、本活動はその典型例でもある。

なお、東京地区図書館見学会は、見学先の図書館を毎年少しずつ変えながら現在も続けられている（資料編「６．中部・東京地区図書館見学会一覧」参照）。図書館講演会、図書館ガイダンス、東京地区図書館見学会、さらには後述の『同志社図書館学年報』など、渡辺のはじめた活動のほとんどは長い年月を経た今日も継続されており、彼の方向性の正しさと、制度設計の確かさを示していると言えよう。

５）『同志社大学図書館学年報』および『同志社図書館情報学』の刊行

本誌『同志社大学図書館学年報』は、1975（昭和50）年に青木および渡辺によって刊行された。本誌を刊行すること自体はその数年前から吉田と青木によって計画されていたが、実際に刊行されたのは渡辺が着任してからであり、渡辺は青木とともに本年報の内容等に関する基本的な設計を行っている。『同志社大学図書館学年報』は、同志社大学図書館司書課程の活動記録を掲載するだけではなく、当初から「図書館情報学入門講座」（吉田貞夫／No.１より連載）のような教科書的な内容、「図書館学事始め」（青木次彦／No.１）のような研究論文、「図書館学教育とその教授法―よりよき授業形態を求めて―」（渡辺信一／No.１）のような教育に関する提言まで、幅広い内容を掲載するものとされた。

渡辺らが『同志社大学図書館学年報』を単なる活動報告とはしなかった背景には、同志社大学における図書館学教育を、司書養成だけではなく学部の課程レベルでの研究と結びつけたいとの意図があったことが感じられる。さらに1990（平成２）年には大城と

コラム：図書館司書課程資料室の絵画

図書館司書課程資料室には今も右のような絵が飾られている。この絵は、図書館司書課程資料室で行われていた勉強会に熱心に参加していた学生のひとりで、不幸にして志半ばにしてこの世を去った高野裕子さんにまつわるものである。『同志社大学図書館学年報』第17号には、以下のような記事がある。

「去る７月27日、司書課程資料室のボランティアであった高野裕子さん（文学部新聞学科　90卒業）が急逝されました。大学院の聴講生と枚方市立図書館の非常勤職員をつとめるかたわら、毎週木曜日に本学資料室でお手伝いをして下さいました。幼い頃からご両親の影響で絵本や児童書に親しみ、同志社中学・高校時代、数多くの蔵書に目を通した愛書家でもあったそうです。図書館演習（レファレンス）の授業での、よく調査した内容のある口頭発表と、シャープな的を得た質疑応答が印象に残っております。公共図書館員をあれ程強く望んでいた、若い一人のいのちがこの世から消滅していったことがいたましく、心から哀悼の意を表する次第です。なお、ご両親からご本人の初給料の一部とギフトカードをあずかりました。新しい資料室に残る形で使わせていただきく存じます。」（渡辺信一）

共同で図書館情報学に関する研究論文を掲載する独立の学術雑誌である『同志社図書館情報学』を『同志社大学図書館学年報』の別冊の形で刊行開始している。その後、『同志社図書館情報学』は独立の学術雑誌として現在も刊行されている。

６）司書課程資料室の設置

1980年代頃から徐々に図書館司書としての求人が少なくなり、図書館員として採用されることが困難さを増すにともなって、司書課程で開設されている科目の内容だけにとどまらず、より幅広い内容を学ぶ場の必要性が高まることになった。

渡辺は、授業時間以外に学生が学ぶ場の必要性を大学当局に説明し、粘り強い交渉の末に司書課程資料室の設置に成功している。司書課程資料室は、当初は倉庫程度の大き

さで、まとめて資料が置けるだけであったが、1986（昭和61）年９月からは今出川校地の啓明館に移転して若干の書架が設置された。さらに、1991（平成３）年６月には新町校地の臨光館３階で学習室、実習室等の機能も持つ空間として開室した。司書課程資料室には、図書館情報学関連資料が収集保存されただけではなく、司書課程の教員、嘱託講師、大学院生、学部学生などに広く利用された。渡辺ら教員の管理のもと、学生がボランティアで運営を担当し、学生自身による学習活動をはじめ、研究・調査活動などにも広く利用された。その後、2004（平成16）年３月には尋真館１階に移転し、非常勤職員１名も配置されて現在も運用されている。

また、図書館司書の養成においては、実際の資料を用いた実習が不可欠である。特に、資料組織演習の授業においては、学生分の分類表、目録規則、件名標目表が必要となるほか、それらを適用する対象として大量の図書も必要となる。さらにレファレンス演習では様々な参考資料を使って演習が行われるが、学生の演習を実際の図書館で毎週行うことは困難であり、専用の実習室の存在が望まれる。司書課程資料室には、最新版の日本十進分類表（NDC）、日本目録規則（NCR）、基本件名標目表（BSH）が学生の人数分配置されていることに加え、参考資料なども多く所蔵されていることから、「図書館演習」などの授業も行われている。

渡辺は、司書課程資料室で授業時間以外にも学生に対する指導を行っており、彼を慕う多くの学生が集まっていた。年度によっては、学生たち自身が図書館情報学の研究を自発的に行う研究会が組織され、資料室内で活発に調査、議論などが行われることもあった。学生たち自身で研究活動を行うほか、実際に図書館でおはなし会を開催するなど、年度によって多彩な活動が行われることもあった。また、年度によっては図書館員を目指す学生たちが集まり、自主的な勉強会が行われることも多かった。渡辺もこれらの研究会、勉強会に熱心に関わり指導を行った。こうして指導を受けた学生の中には、現在図書館で働くものが数多く存在する。

以上述べてきた渡辺の教育面での業績はあくまで一例である。たとえば、その他にも渡辺は同窓生との連絡を密にしており、多くの学部学科にわたって卒業生が存在し、公式な同窓会組織が存在しない司書課程修了生の中で、図書館に関わる職業に就いた卒業生の多くを含む同窓会的な組織も作り上げている。同志社大学図書館司書課程での行事などにおいて、今も卒業生の多くと連絡がとれる状況は、渡辺がいなくては存在しえなかったともいえよう。

（２）研究面での業績

渡辺の研究面での業績は、主として学校図書館に関わるもの、図書館司書養成に関わ

るものが大きい。

１）学校図書館研究に関わる業績

渡辺の研究面での業績のうち、最初にあげるべきは学校図書館研究に関わるものであろう。彼はハワイ大学への留学から戻ってきた直後から本格的な図書館学研究者として学校図書館研究を行っている。日本では当時数少なかった初期の頃からの学校図書館研究者であるということができる。特に、アメリカの学校図書館基準や、学校図書館のメディア・プログラム開発のためのガイドラインなどを日本に紹介した功績は顕著である。渡辺がアメリカの学校図書館の新しい基準や、ガイドラインを翻訳、紹介しはじめた1970年代当時、日本においても学校図書館による資料提供や「調べ学習」についての議論は少しずつ行われていたが、それらを支える理論については、まだまだ不十分であった。その時代から継続的に研究活動を行い、しっかりとした理念に基づく明確なビジョン、それを実現するための具体的な方策をが包括的に述べた『インフォメーション・パワー』（ALA, 1998）やアメリカの学校図書館基準を紹介したことは、学校図書館に関する新しい考え方を示すという点で大きな意義があったといえる。社会基盤を異にするアメリカの学校図書館に関する基準等が、そのままわが国に適用されうるものではないとしても、それらはわが国の学校図書館関係者に新しい視点を提供するものであった。

渡辺がこれらの基準やガイドラインを翻訳・紹介したことに関して、岩猿敏生は以下のように述べている[1]。

「外国書の翻訳作業は、かつては論文を書くことよりも、学問上の評価としては低く見られることもあった。翻訳は外国語を日本語にするだけの、語学力に関わる問題のように考えられることがあったが、海外の多くの文献の中から、どれが翻訳、紹介するに値するかを判断するには、その方面に関する深い専門知識が必要である。それに、専門分野の翻訳には、専門用語に対する知識がなければ、専門分野の文献の翻訳自体が困難である。渡辺が関わったいくつかの翻訳のうち、とくに『メディア・プログラム―アメリカの学校図書館基準―』（全国学校図書館協議会、1977）や『インフォメーション・パワー―学校図書館メディア・プログラムのガイドライン』（全国学校図書館協議会、1990）、さらに渡辺が代表を勤める同志社大学学校図書館研究会訳『インフォメーション・パワー：学習のためのパートナーシップの構築』（発売 JLA、2000）等は、日本の学校図書館界に大きな示唆を与えるものであった。優れた翻訳は、わが国の現実に対する鋭い問題意識を与えてくれるものである。」

もちろん、渡辺は単に基準やガイドラインを翻訳しただけではない。これらの内容に関する分析を行うとともに、わが国での適用に関しての検討などを行っており、たとえば以下をはじめとしていくつかの論文を発表している。

①渡辺信一．アメリカの学校図書館基準に学ぶ.『学校図書館』(370)、p9-14、1981
②渡辺信一．メディア・プログラム―新しいアメリカの学校図書館基準.『図書館界』29（６)、p219-227、1978
③渡辺信一ほか．アメリカの新しい学校図書館基準に関する一考察.『同志社大学図書館学年報』別冊『同志社図書館情報学』10、p22-83、1999

渡辺の研究スタイルは、自身も翻訳や調査・分析を行うかたわら、関西地区の学校図書館関係者を中心に同志社大学学校図書館研究会を組織し、多くの人々の力を結集する形で研究を進めるものであった。そのため、学校図書館関係の研究業績は、渡辺を中心としたグループで成し遂げられたものも数多い。

２）図書館学教育分野に関する業績

渡辺信一のもうひとつの大きな業績は、図書館学教育に関わるものである。渡辺の図書館学教育に関する手法は、単に自身で調査を行い提言をまとめるだけではなく、多くの図書館司書課程担当者との議論を行い、それらを集約することが中心となっている。

渡辺は1987（昭和62）年から日本図書館研究会図書館学教育研究グループの主宰として、主として京阪神地区の図書館学研究に関わる教師、研究者をまとめ、熱心に研究、協議を行っている。1998（平成10）年に行われた図書館法施行規則の改訂に先立って、いち早く科目改正案を提案するなど、この研究グループが司書課程科目の検討を行った結果が社会にも大きく寄与したことは広く知られている[(1)]。教育内容を実際に変えていくためには、多くの意見の集約と社会的な合意が必要であることを考えれば、渡辺が用いた手法は図書館学教育を実際に社会に根付かせていくために最適であったといえよう。この研究グループは、渡辺の主宰のもとでほぼ隔月で20年以上にわたって継続している。このように継続して議論を行っているグループは数少なく、渡辺のリーダーシップによるものといえよう。

図書館学教育分野における渡辺の論文としては以下などがある。

①渡辺信一．わが国における図書館員養成―その沿革と課題.『人文学』(152)、p32-57、1992
②渡辺信一.図書館員養成制度について：わが国と諸外国との比較のために.『教育文化』１、p114-97、1992
③渡辺信一．図書館員の養成と教育.『図書館界』45（１)、p151-160、1993
④渡辺信一．わが国における図書館学教育／司書養成の現状と問題点―カリキュラム改定の経緯と教育部会の取り組みを中心に.『図書館雑誌』89（６)、p418-422、1995
⑤渡辺信一．司書養成のための省令科目改定の動き.『図書館雑誌』90（12)、p990-991、1996

⑥渡辺信一．わが国における図書館学教育／養成の動向―問題提起のための私論．『図書館界』47（５）、p284-288、1996
⑦柴田正美、渡辺信一．図書館法・学図法改正にかかわる養成教育の現状と問題点―授業概要に見る新カリキュラム．『図書館界』50（２）、p76-83、1998
⑧渡辺信一ほか．わが国における学校図書館司書教諭養成の諸問題：平成11年度の新カリキュラム移行に関するアンケート調査の結果を中心に．『図書館界』51（２）、p76-82、1999

３、人物・その他

渡辺の人物像として、彼を知る人ならば全員が「面倒見が良い」「几帳面で真面目」「気配りの人」という三点に同意するだろう。渡辺は、図書館に興味を持つ人であれば司書課程履修の有無を問わず、自分にできる限りの助力を行い、最後までフォローし続けようとする人である。そのために努力する彼の態度は、彼に関わる人々誰もが敬意と感謝の念をいだくものであった。本誌に寄せられた卒業生からの文章の中にも、渡辺との思い出を語るものがいくつも含まれているのは、それ故であろう。また、お酒も好きで多くの人と乾杯することを好み、興が乗るとカラオケで韓国語や英語の歌を熱唱する愉快な面も持ち合わせている。一方で、自分の信じる道を突き進むという熱い心を持つ人物でもあり、筋が通らないことに対してはとことんまで議論をする熱血漢でもある。

〈注〉

⑴「渡辺信一教授の人と業績」（『生涯学習時代における学校図書館パワー：渡辺信一先生古稀記念論文集』同論文刊行会、2005、p1-9）

（原田隆史）

５．大城善盛

１、略歴

大城善盛は、1940（昭和15）年沖縄県那覇市に生まれた。1963（昭和38）年に琉球大学文理学部英語英文学科を卒業し、沖縄県立名護高等学校の英語担当教諭となった。1967（昭和42）年に同校を退職し、米国 Emory　大学に留学した。1969（昭和44）年に同大学大学院を修了し、Master of Librarianship を取得している。その後、1975（昭和50）年までミシガン大学アジア図書館でライブラリアンとして勤務した。1975（昭和50）年に帰国、京都産業大学で図書館員として勤務することとなった。京都産業大学の図書館員である間、1977（昭和52）年にはミシガン大学大学院修士課程（アジア研究）

図書館ガイダンス、大学分科会
（2000．５．６　石黒真由美氏提供）

を修了し、Master of Arts の学位を授けられている。この足かけ９年間に及ぶ在米生活での経験がのちに、大学図書館における図書館員養成、利用者教育についての研究に大きな影響を与えている。1983（昭和58）年には京都外国語大学に図書館司書課程担当の助教授として着任。同大学では教授に昇格して1989（平成元）年３月まで勤務した。

1989（平成元）年、青木次彦教授の退職に伴う後任として同志社大学文学部教授として着任。渡辺信一教授と共に図書館司書課程を主として担当した。なお、2003（平成15）年には同志社大学の制度を利用してハワイ大学に１年間海外研究に従事している。2006（平成18）年３月に同志社大学を定年退職。その後、2007（平成19）年度より京都光華女子大学、花園大学で非常勤講師として教鞭をとっている。

２、業績

大城善盛は、同志社大学においては一貫して情報管理、情報組織論を中心に講義を担当ている。着任後に行われた1992（平成４）年のカリキュラム改訂では渡辺と共に、その策定にあたり、自身は「情報管理」「情報組織論」「図書館演習Ⅰ」などを担当している。また、同志社大学文学部教育学専攻に大学院が設置されるにともなって、大学院課程での「学術情報利用教育論特講」も担当。図書館情報学を専攻する大学院生の指導を行っている。彼が育てた大学院生は図書館情報学の教員として現在活躍している。

大城の教育面での業績としては、渡辺と共に同志社大学図書館司書課程の安定期を支えた功績が大きい。渡辺とともに何度かのカリキュラムの改訂を行ったほか、『同志社大学図書館学年報』の別冊として『同志社図書館情報学』を刊行に導いている。これは、学部の課程レベルとして位置づけられていた図書館情報学の学問的、理論的側面を追求しようという思いから行われたもので、その後、『同志社図書館情報学』は独立の番号を与えられ、現在も刊行されている。さらに、渡辺と共に東京地区図書館見学会や図書館講演会を開始するなど、現在まで続く同志社図書館司書課程の様々な活動をはじめたことは特記に値する。

研究面では、「図書館情報学教育」および「専門職としての図書館職」、「情報リテラシー教育」および「学習と学校図書館」という大きく分けて２つの領域に興味を持ち、研究

活動を行っている。

「図書館情報学教育」および「専門職としての図書館職」については、図書館先進国の図書館員養成、アメリカにおける専門職としての図書館職を研究することで日本における方向性を探るという手法をとっている。このような研究の例として『21世紀の情報専門職をめざして―カナダとアメリカ合衆国における図書館情報学教育と情報環境』(関西大学出版部．1988．倉橋英逸らと共著）があげられる。これは、カナダとアメリカ合衆国における図書館情報学教育の実態を、大学の計算センターと図書館の変革まで含めて調査し、21世紀の情報専門職教育の内容と方法の方向性を探ろうとしたものである。

また「21世紀の大学図書館と求められる司書の能力」(『教育文化』10号　p106-84　2001）では、大学図書館の基本業務を５つのカテゴリーに分けて、そこで求められる司書の能力を考察し、今後の電子情報源の増加に対応する司書として、デジタル技術の取得、書誌レコードの作成、利用者の情報リテラシー教育も行える能力が必要としている。

もう一つの研究テーマである「図書館における利用者教育」については、1994-95年に大学図書館における利用者教育の実態について全国レベルで調査を行った。大学図書館が従来のオリエンテーションや文献探索指導に留まらず、より根本的な「情報リテラシー教育」を担うべきであるという提言は、まさにインターネット時代に突入した当時の図書館界にとって、時宜を得た内容であると評価されている。

これらに続く著作として、アメリカの大学図書館における情報リテラシー教育を調査し、その大学教育の中での位置づけなどについて究明しようとした『Web 授業の創造―21世紀の図書館情報学教育と情報環境』(関西大学出版部、2000、倉橋英逸らと共著）がある。これは、大学における情報技術を導入した教育や学習の変化、遠隔学習の変化等の中に Web 授業を位置づけ、さらに Web 授業を支える運用体制、図書館の役割、著作権等の問題を包括的にまとめたものである。大学図書館員が情報リテラシー教育を担当できる資質を備えた専門職として位置づけられ、情報リテラシー教育が大学教育の中で独立した科目として認められることを日本の大学図書館界が目指すべきという信念が研究の基底にあると言ってよい。

大城にとって、大学図書館は利用者である学生の自立的、積極的な利用を支援する図書館員の存在が不可欠であり、そのためには図書館員にファカルティの地位が与えられることが先決という理念があり、諸外国の図書館員養成や利用者教育の在り方を調査、研究し、日本の図書館界に示唆を与えてきたといえる。さらに最近は、情報リテラシー教育との関係で、「情報リテラシー教育とは何か」を究明する中で、「学習とは何か」を究明する必要性を認識し、「学校図書館と学習」、特に情報リテラシー教育との関係を明らかにすることにより学校図書館の役割を再定義しようとしている。

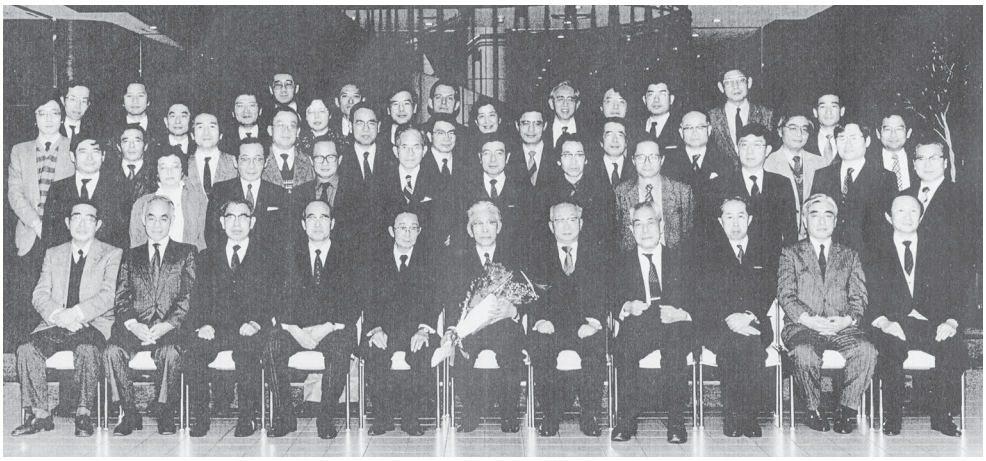
３、人物

大学院で大城から直接指導を受けた中島幸子は、大城の人物像について以下のように述べている。「大城は温厚な人柄で、授業においてもいつも静かな語り口で、学生の主体的な意見を尊重し、型通りの結論に導くよりはむしろ自由闊達な議論がなされることを重視した。学生の書いた文章には「てにをは」まで細かく添削し、理路整然とした簡潔な文章を書くように指導した。これは長かった在米生活の中で、構文が明らかな英語の文章に慣れ親しんでいるからであろう。研究に疲れたときはテニスで気分転換を図るライフスタイルは現在も続いている」。

（原田隆史）

（うじごう　つよし。社会学部教授、はらだ　たかし。社会学部准教授）

京都図書館協会創立十周年記念式典の夜　懇親会にて　昭和32年10月26日　於 岡崎寮
最前列の右端が小野則秋、４人目が竹林熊彦、５人目が大佐三四五（写真提供は、酒井忠志氏）



青木次彦先生御退職記念祝賀会　昭和63年３月５日（土）　於 新島会館

司書課程ホームカミングデー '90―岩猿敏生・森耕一両先生と共に―
（1990．６．２　同志社新島会館にて　写真提供：北川敬子氏）

同志社大学図書館司書課程50周年記念祝賀パーティ　2004年10月10日　於 新島会館

渡邉信一先生古稀記念論文集出版記念祝賀会　2005年３月19日　於 新島会館（平井むつみ氏提供）

「宇治郷毅さんをお迎えして」の会　2007年７月22日　於 寒梅館

同志社大学図書館司書課程ガイダンス・原田隆史先生歓迎会　2011年４月30日　於 新町・尋真館